

九州帝國大學に學んだ留學生：醫學部朝鮮人留學生 を中心に

金, 珽実
九州大学留学生センター：講師

<https://doi.org/10.15017/4782095>

出版情報：九州大学留学生センター紀要. 25, pp.51-68, 2017-03. 九州大学留学生センター
バージョン：
権利関係：

九州帝國大學に學んだ留學生

— 醫學部朝鮮人留學生を中心に —

Studying medicine at the Kyushu Imperial University

— focusing on Korean International Students —

金 斑 実*

1. はじめに

筆者は近年九州大学の歴史及び留学生史について調査研究を行っている。度々間島の史料調査で中国の延辺大学¹を訪れていたある日、退官された歴史研究の先生と一緒にキャンパスを見学した時にある人物の胸像を指して、「盧基舜を知っていますか」と尋ねてきたのである。盧基舜は同大学の創設に関わった人物で、九州帝国大学で勉強し、延辺の医療発展に大きく貢献したとして、また「神の手」として、延辺ではたいていの人がその名を知っているということであった。九州大学出身である筆者が知っていると思って聞いてきたのである。延辺では著名で、しかも筆者の母校の出身者であるのに、その業績を全く知らなかった。そこで、大学に戻り、盧基舜博士について調査したのが、本研究のキッカケであった。また、医学部の歩み、九州大学新聞、新聞記事及び収集した史料を解読する中で、様々な人物像が明らかになってき

た。金台鎮は帝国大学の医学部卒業生として第1号であり、韓国政府派遣留学生として留学後に日韓不平等条約の締結に反対して同盟休学を行ったメンバーの一人でもある。鄭民澤も独立運動家、文学者とのつながりをもっていることからこれらの基礎的研究を通して、今後日本に於ける他地域の留学生との比較研究によって、その特質が浮き彫りにできる一步になるのではないかと思われる。

九州帝国大学留学生に関する研究としては、主に、①九州大学韓国研究センター『朝鮮半島から九州大学に学ぶ 留学生調査（第1次）報告書 1911～1965』（2002）、②研究代表者 折田悦郎『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』平成14・15年度科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（2004.3）、③高仁淑「日本の大学に入学したアジア人留学生の追跡調査研究 — 九州帝国大学への朝鮮人留学生を中心に —」『九州大学大学院教育学研究紀要』5号 2002²がある。

*九州大学留学生センター講師

1 中国吉林省朝鮮族自治州延吉市に所在する省立総合大学である。中国少数民族である朝鮮族の高等教育のため、朝鮮（韓国）語と中国語とともに教授言語にする国家重点大学と指定されている。中国の政治家で現在党内序列第三位にある張徳江も本校の朝鮮語学部出身で、本学の党委常委、副学長も務めた人物である。

2 九州大学韓国研究センター『朝鮮半島から九州大学に学ぶ — 留学生調査（第1次）報告書 1911～1965』九州大学韓国研究センター、2002.3；折田悦郎『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書、2004；高仁淑「日本の大学に入学したアジア人留学生の追跡調査研究 — 九州帝国大学への朝鮮人留学生を中心に —」『九州大学大学院教育学研究紀要』5号、2002

本研究は、以上の先行研究を踏まえて植民地時代に日本への留学の道を選んだ医学者の足跡、殊に九州帝国大学の留学生に焦点を当てて帝国大学初期からの留学生像を明らかにすることを目的としている。詳細は、大学資料、新聞記事、同窓会資料などを使い、九州帝国大学への留学のキッカケ、何を学び、どこでどのように活躍したか、植民地時代植民地人としての朝鮮人が、どのような世界認識で将来を描き出し、帝国を舞台に夢を勝ち取っていき、戦後の彼等の人生の中でどのように影響していたかも探っていきたい。

2. 九州大学医学部の歴史

九州帝国大学医学部の歴史について触れておこう。「九州帝国大学医科大学の前身は福岡医学校にして明治36年同大学創立以来満25年の星霜をへたり、其の間多数の医学士を養成し幾多医学上の發明研究を成就発表し、以て帝国の教育及び医術衛生に貢献すること少なからず惟ふ」と『九州帝国大学医学部25年史』で初代総長である山川健次郎が祝辞で述べている³。

九州帝国大学は1903年4月に設置された京都帝国大学福岡医科大学を前身としている。更に遡っていくと、1867年、当時福岡を統治していた福岡藩は賛生館という医学教育を行う藩校を天神に設立した。1872年に学制が施行されるといったん廃校となったものの、附属病院はその間も継続した。同病院は1874年に修猷館の附属診療所となり、1879年には福岡県立福岡医学校の附属病院へ改組された。福岡県立福岡医学校が廃校となった後は福岡県立福岡病院として存続することになった。1896年6月22日、現在の病院地区である福岡県筑紫郡千代村に移転した。

1886年に帝国大学令が公布されると九州に帝国大学を設置する機運が高まり、1900年1月29日の第14帝国議会において「九州東北帝国大学設置建議案」が可決された。建議案の可決後も古くから医学の盛んだった長崎県や第五高等学校が設置されていた熊本県との間で誘致の綱引きが行われたが、結局は賛生館の流れを汲む福岡県立福岡病院を母体に1903年京都帝国大学の分科大学として福岡医科大学が設置され、福岡県技師から転じた大森治豊が学長兼附属医院長に任じた。

また、日露戦争後の産業の発展により、工業の発達が要望され、それを担う高等教育機関拡充の要望が高まったところ、福岡にも工科大学設置の声が高くなった。文部省は時の文部次官真野文二を創立準備委員長に命じ、東大の新進学徒の中から選んで教授候補として欧米に留学させる一方、建築工事が1910年6月より工を起こして創立の業着々と進捗し、かくて同年12月勅令第四百四十八号をもって九州帝国大学の設置が公布された。それと同時に勅令第四百四十九号をもって九州帝国大学工科大学官制が公布され、翌1911年1月から施行された。初代学長は文部省専門学務局長福原隼二郎であったが、同年4月1日理学博士山川健次郎が九州帝国大学総長に任ぜられた。九州帝国大学は、東京、京都、東北に次ぐ日本の四番目の帝国大学として発足したのである。

その後は、福岡県の寄付（135万円）と1919年2月の官制によって農学部が設置された。この時、既に東大と北大にはそれぞれ駒場農学校と札幌農学校の後身である農学部が存在しており、九大農学部は三番目の農学部の創設であり、当初から総合大学の一部として発足した最初の農学部であった。本田幸介が教授に任命さ

れ、初代学部長に就任し、1921年4月から授業が開始された。また、日本政府の高等教育機関拡張計画の一部として、1924年9月26日に九州帝国大学法文学部が創設され、美濃部達吉が学部長になり、1925年4月20日に第一回入学式が挙行された。理学部は1939年の物理学科、化学科、地質学科、1942年の数学科の開設に始まる。

留學生受け入れは、1910年京都帝国大学福岡医科大学に入学した朝鮮人学生金台鎮が嚆矢で⁴、上記の5学部は1945年までに中華民国、「満洲国」、タイなど、また当時植民地たる台湾、朝鮮の出身を含んで、約733名の留學生を受け入れた⁵。

当時九州帝国大学には、学生、大学院、専攻生、生徒、聴講生、選科生、大学院特別研究生などの呼び名に分けられる。1918年に『九州帝国大学研究科規定』が設けられ、「九州帝国大学分科大学に医学及工学に関係ある事項を研究せんとする者の」ために研究科を設置することにした。一年後の1919年4月に同規定は『九州帝国大学専攻科規定』に改定され、それ以降も修正を加えられ、1923年8月には、専攻生規定が廃除され、通則の一章になった。その中には、「本学学部にて特殊事項に就き攻究せんとする者あるときは設備に差支なき限り専攻生として之を許可することあるべし」「医学部に於て攻究をなさんとする者は左の資格の一を有する者に限る 一、医師、歯科医師及び其の資格ある者 二、大学令に依る大学、文部省直轄諸学校及専門学校令に依る学校を卒業したるもの」と15条にわたって定められている。医学部における専攻生は1920年度から受け入れている

が⁶、留學生専攻生としては1925年に入学した朝鮮の崔六洲甲である。また、1929年に戦時体制を反映して、帝大並びに官立医大に臨時附属医学専門部が設けられることになり九州帝国大学にも設置され、1952年3月まで続いた。医学部の学科・講座の変遷⁷は次のようになる。

- 明治36. 4. 1 解剖学第一（形態解析学）、内科学第一（病態修復内科学）、外科学第一（臨床・腫瘍外科学）、眼科学
- 明治36. 9.11 生理学第一（総合生理学）、生化学第一（医化学）
- 明治37. 5.20 解剖学第二（形態機能形成学）、病理学第一（病理病態学）、衛生学、小児科学（成長発達医学）、外科学第二（消化器・総合外科学）
- 明治38. 3.22 薬理学（生態情報薬理学）、内科学第二（病態機能内科学）、婦人科学産科学（生殖病態生理学）
- 明治39. 4.23 法医学、皮膚科学、神経精神医学（精神病態医学）、耳鼻咽喉科学
- 明治40. 5. 9 病理学第二（形態機能病理学）
- 明治41. 4. 1 生化学第二（分子細胞生化学）
- 明治41. 5. 1 解剖学第三（神経形態学）
- 明治42. 5.24 内科学第三（病態制御内科学）、整形外科学
- 大正 7. 6.18 生理学第二（細胞・システム生理学）
- 大正11. 5.29 歯科学口腔外科学

4 「朝鮮人金台鎮を準学生として入学を許可せり、之を外国人入学の嚆矢とす」（九州帝国大学医学部編1928.10）p.56

5 折田悦郎『九州帝国大学における留學生に関する基礎的研究』科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書、2004

6 九州帝国大学医学部編『二十五年史』九州帝国大学医学部事務所 1928.10 p.371

7 『九州大学医学部百年史』九州大学医学部創立百周年記念事業後援会2004.3 pp.834-840

1943	専攻生		重村昌宏			鄭昌杰1945.8.24
1943	専攻生		天野万達			金萬達1953.10.24
?			金容周	1945		
?			李權	1945		
他に学位のみを取得した人物						
			姜日永			1935.4.2
			金龍業			1943.2.19
			松島信雄			1943.4.17
			光本重信			1943.7.27

上記のデータから28名が九州帝国大学で学んでいたことが確認できる。他に学生ではないものの、4名が九州帝国大学で学位のみを取得したことも補足説明する。以下ではデータ上の人物像を詳細に探っていきたい。

4. 学生・専攻生・生徒の人物像

1) 金台鎮 (1885-1919)

前述したように、金台鎮は京都帝国大学福岡医科大学の時代に入学した学生で、九州帝国大学では第一号の留學生で、また帝国大学の医学部卒業生としても第1号である。まず『福岡日日新聞』の記事をみよう。

『福岡日日新聞』1910年9月24日

本月19日付で福岡医科大学準学生として入学を許可された朝鮮京城出身金台鎮氏は原籍平安南道祥原郡黒隅里、15歳頃まで田舎の先生の下で読み書きを学んで、16歳で父兄とともに京城に出、兄圭鎮氏は京城南部石井洞で写真師を仕事とし父兄ともに70歳で健在、兄の他姉2人が朝鮮にいる。

台鎮氏は京城で約3年英語を学び、19歳(1903年)日本留學生を命ぜられて同年東京府立第一中学校入学、24歳(1907年)4月卒業、同年10月岡山第六高等学校3部生

として入学、1910年7月26歳で卒業、9月併合以来最初の朝鮮人学生として福岡大学¹⁰に入学。

記者は昨日(9月23日)この新同胞を大学前にある宿舎を訪問した。

紺緋の単衣に兵児帯を軽く締め、悠然と客(記者)を迎える様子はただの短髪で賢そうな好青年で、一見何も変わるところがないようだけど、国を喪つた思いがさぞかしいと思うと何となく同情せざるを得ない。

記者の質問に氏が応えるところによれば、氏が高等学校卒業後約2ヶ月間(7月から9月)京城に省して9月15日に出発した。併合の大事件は氏が帰省中の出来事であったが、「亡国は政治の罪である。私の祖国の政治家が早く目を覚ましたならばまだなんとかすることもできた、しかし今となつては議論しても愚かなことである、ただ各々がその仕事を頑張つて国家や人々のために尽くすだけである」とつらい心境を語つた。

なお氏が語るところによると、氏が留學生として東京府立中学に入った当時の朝鮮人学生は全員で50名で、特に朝鮮人学生だけで1学期を過ごし、約3年半の短期で中

10 京都帝国大学福岡医科大学を指す。

学の課程を終えたのであるが、卒業の時期にはすでに35名に減少し、そのうち、熊本第五高等学校に文科1、法科2（うち法科2名は中途退学）、岡山第六高等学校に理科1、医科1、そしてその医科は金氏で、他の熊本と岡山の各1名はまだ高等学校3年生として在学し、その他の同期留学生の多くは東京の各種の専門学校に入学しているようである。（一記者）（下線は筆者、以下同様）

彼の足跡を上記の「福岡日日新聞」（現在の西日本新聞）を沿って確認していこう。まず、金台鎮は日本留学生として外49名と名前が挙がっているのが確認¹¹できるが、それは、韓国皇室特派留学生として1904年に東京府立第一中学（現在の日比谷高等学校）に入学して特設課程で学んでいたが、「府立一中に入学したのはそのうち四六名で、彼らは翌三十八年十二月後述するような事情から同盟休学を行い全員退学処分を受けた¹²」という。この時期といえ、乙巳条約を締結された時期で、それに反対して同盟休学を行ったため、退学させられたのである。しかし、「其後同国政府の懇願もあり、又、統監附よりの申出もありたる為め、改悛の実顕著なるもの十四名に対し今度復学校を許し¹³」¹³だが、その中に主人公がいる。その後、岡山第六高等学校に入学し、卒業して京都帝国大学福岡医科大学の留学生として入学することになる。

勉強傍ら月刊学会誌『太陽学報』、留学生機関誌『大韓留学生学報』に投稿したり、賛助金を出したりしている。例えば、『太極学報』の第2号に義捐金を五円寄付（1906年9月）、同第3号に「月及銀河」を倉岡生金台鎮の名前で発表し、同一号に義捐金を五円寄付（1906年10月24日）、『太極学報』第4号に主人公を含めて会員57名（太極学会会員名簿録）、同第5号に義捐金を五円寄付（1906年12月24日）、「わが国官費生中、二十五人が今回東京府立中学校を卒業した」金台鎮を含む（第9号 1907年4月24日）と発表している。『大韓留学生学報』の第1号（1907年3月3日）から1906年9月2日の第一回総会で主人公が翻訳者として選ばれたことが確認でき、同第2号に「競争論」（1907年4月7日）を発表された。

「賢そうな好青年」である彼は韓国の政治に失望しただろう。韓国皇室特派留学生というチャンスを掴み、勉強傍ら留生活動に積極的に参加し、1905年の乙巳条約締結の時は同盟休学にも参加したが、それでは国を取り戻すことができないと理解しただろう。帰省中に日韓併合を目の当たりにして「ただ各々がその仕事を頑張って国家や人々のために尽くすだけである」と強い決心を知らせている。

九大卒業後は帰国して、朝鮮総督府直属機関である中央医院に勤務し、尹致昊¹⁴と関わりをもっていたことが確認できる¹⁵。その傍ら、「共進会と一般衛生の注意」（『新文界』第30号1915年9月）と「衛生講話」（『曙光』第1号1919年

11「照会 第十七号 日本留学生リストを日本公史館へ伝送することを要請する」学部大臣李載克より外務大臣李夏榮閣下へ 1904年10月7日

12 阿部洋「旧韓末の留学（1）」『韓』第29号 東京韓国研究院 1974年 p.68

13「韓国留学生の近状」明治39年7月3日『近代日本のアジア教育認識・資料編 第2巻』p.155

14 朝鮮は1876年2月の日朝修好条規によって開国し、新文物を吸収すべく81年5月には日本に紳士遊覧団62名を派遣した。遊覧団の随員兪吉濬、柳定秀は慶応義塾に、尹致昊は同人社に残留し、最初の海外留学生となった。

15 與文姫母性見中央医院金台鎮、Grandson 龍求 sick—had to bring him home from Mr. 南宮's house. Dr. 金台鎮 called in. 尹致昊日記七（韓国史料叢書 第19輯）

11月30日)を發表した。しかし、1919年にスペイン風邪の流行により、34歳で他界した。

結果的に金台鎮は国を失ったのは政治家の愚かさによるものとし、医学の道を選んで、国家、人々のために頑張ろうとしていた¹⁶。中国の魯迅も、国の人々を救うためには最も良いのは日本に留學生して医学を専攻することだと考えていたが、それに近いものであったに違いない。九州帝國大學は金台鎮という第一号の留學生におのずとその決心の実現に道を開いてあげたに違いない。

2) 鄭民澤

1917年に三高から九州帝國大學に入学して勉強する傍ら、東亜日報に「地方青年會 勃興斗其事業 (全2回)」(福岡 鄭民澤、1920.6.16と1920.6.18)「輿論斗 衛生思想 (全2回)」(1920.6.30と1920.7.1)を投稿しており、1921年に卒業して医学士となる。朝鮮總督府直屬機関の医員として働き、1927年から京城医学専門學校第一内科講師を務め、その後京城帝國大學で教鞭をとりながら同大學付屬病院でも勤めていた。同時に總督府衛生室主任でもあり、現職のまま、来る15日より三平醫院を開業し、三週間無料で診察するという¹⁷。詳しくは、高城郡長箭港にある鄭民澤醫院では新年から極貧者に毎月第一・第三日曜は無料で診察を行うという¹⁸。彼は多くの独立運動家、文学者とつなが

りがある。劉相奎(号:太虚)¹⁹は次のように述べている。

鄭民澤君、…君は雄弁家である。君の熱弁を吐き出したら場所を問わない。それで偶に『ドンキホーテ』のように見えるが、その話には多く傾聴すべき句があり、そして無心じゃない人なら君の胸中には言えない鬱憤がいっぱいであることが想像できる。…君は文化的空氣だけを呼吸する新時代の寵児のように見える。君は『醫師ではお金稼げない』という。この言葉は正しい。しかし、君は他の方法でお金を稼げようとする様子だ。これは自家撞着である。君は筆者が知っている人の中、醫師非醫師は無論、一番聰明な人であることが分かる。禁酒の決心を遅らせないでこつこつと医道だけ進めば必ず成功する日が来ることを信ずる²⁰。(…は筆者、以下同様)

ここで、「雄弁家、ドンキホーテ、鬱憤、文化的空氣、新時代の寵児、禁酒」などのキーワードを並べてみるが、当時の政治情勢に対して鬱憤はあったものの、表向きに表現できなかったのではないかと思われる。実際、併合直後の1911年6月に「朝鮮總督府留學生規定」が定められ、1913年、1915年、1918年と改正が重ねられた。これによって、官費・私費留學生と留學生監督に関する規則を定めたのである。留學生

16 早稲田大學出身の金性洙も同じケースである。1908年渡日、早稲田大學政經學部に留學した1910年に亡国の悲しみを味わい、14年卒業と同時に帰国するが、「『新文化による民力培養とした民族獨立』、これが、學業を終えて帰国する時までに彼の胸中に形成された抱負であり、日帝時代を一貫した彼の生活信条であった。」という。(『新東亜』1970年1月号付録 p.261)

17 『東亜日報』1929.6.16

18 『東亜日報』1933.1.5

19 1897-1936 独立運動家として上海に於いて大韓民國臨時政府で安昌浩の秘書を務め、京城医学専門學校で外科医、また講師として勤め、大衆医療保健啓蒙活動に力を捧げた。患者を治療中、丹毒に感染し、1936年7月18日に死去した。葬式は出獄したばかりの安昌浩の主催で京城医学専門學校の校庭で行われた。

20 「醫師評判記其1」『東光』第29号、1931.12.27

規定だけではなく、留学生内地に於いても総督府の東京出張員事務所、留学生監督機関、そして日本の警察という三重の監督体制下に置かれており、官費留学生に対しては帰国後も監視が及んでいた。

また、玄相允²¹の入院歴より書いた文章を見よう。

…5月上旬頃に総督府病院に入院した。入院してから担当医師は伊藤博士と鄭民澤君で診察の結果は明らかに肺尖加答児だと言明した。7月初めに医者達の了解を得て退院して家に戻った。戻ってからも一日六回ずつ検温して絶対安静を病院規模で厳守した。そして、主治医である鄭民澤君があと二日（生きる）などの時に私の生命のために重要な助言をしてくれた。鄭民澤は漢方医が一日何回も体を起こして動くことを勧める時に責任を持って絶対不可であると強硬に反対した。それだけではなく、鄭君はあらゆる口弁を尽くして私に安心でき、楽観できる言葉を言ってくれた。それで今も私は「医者になろうとしたらまず口弁と熱情があるべきである」主張する。診てくれており、薬も新薬だった²²。

ここでは、ただ単にお医者として彼の顔が窺える。

もう一つ、鄭民澤医院に入院していた崔曙海のことについて書いた文章をみよう。

嗚呼 — 曙海の死、曙海回想記
「嗚呼、曙海兄よ！」

洪暁民²³

曙海兄！

兄がいく何でどうということか。先月申敬淳氏から兄が胃病で鄭民澤医院に入院しているとのことを聞いて行ってみると思ひながら行けなかった今朝（7月9日）の悲報はもしかして兄を他界で会わせようとしているかも²⁴。

間島での経歴を基に書いた『脱出記』という作品で、文壇で評価された崔曙海であったが、胃病に蝕まれて鄭民澤経営の三平医院に入院され、最終的には亡くなってしまいが、鄭民澤と文学者との繋がり深いことが確認できよう。

1963度の『九州大学医学部学友名簿』²⁵によると、現住所が「中華人民共和国三江省樺川県石頭村」になっている。満洲国時代の三江省は現在の黒龍江省齊齊哈爾市に当たるが、詳細についてはこれからの課題になるが、おそらく後に言及する盧基舜と同じように、満洲国における医者確保の必要性により当時の三江省に渡ったのではないかと思われる。

3) 尹治衡

京城医学専門学校出身で、1924年に日本九州帝国大学で学位論文を提出し、韓国で初めて医学博士になった人物である。当時の様子について東亜日報を始め、日本の福岡日日新聞、大阪新聞でも取り上げられている。

東亜日報1924年6月11日

「杏林界喜消息 二十九歳の医学博士、

21 (1893.6.14-1950.9.15) 教育人、文学者、哲学者で高麗大学の初代総長を歴任した。朝鮮戦争の時に北朝鮮に拉致され、亡くなったとされる。

22 玄相允「絶望に陥った肺病から新生を得るまで」『別乾坤』第20号 1929年4月1日

23 (1904.1.21-1975.9.21) 韓国の文学評論家で小説家である。

24 『三千里』第四冊八号1932年8月1日

25 九州医報編集部編『九州大学医学部学友名簿』九州大学医学部同窓会 1963.9

日本博士号を取得するのは朝鮮人として始めてのこと」

二十九歳青年が博士号を取得した。咸南長津出生の尹治衡氏、研究性が多い。友人の成功を聞いて喜ぶ朴昌薫²⁶氏

「九大医学部教授に／鮮人博士論文を出す／独逸に留学後後藤外科で研究／通過後は朝鮮最初の博士」『福岡日日新聞』1924年5月9日

「鮮人で最初の博士／二十九歳の秀才尹治衡君（九大）」『大阪朝日』1924年6月10日

また、彼の初めての医学博士ということで、『別乾坤』に論説「博士号公開」というタイトルで尹治衡のことを公開している。

医学博士 尹治衡

一、咸南 長津郡

二、32歳

三、私立明明中学、京城医専、九州帝国大学医科大学官費留学、独逸 Breslau 大学、九州大学医学部

四、大正13年6月論文が九州帝国大学医学部審査会に通過、7月20日に証書授与式

五、論文7編

六、論文の内容概要

七、学位があるまでの苦心は別として苦学での飢寒の苦痛を受けたにも関わらず同僚と先輩の陰湿な攻撃と中傷があるにも関わらず正義と勤勉は最後の勝利だと頑固な信念の元で学業のために献

身した結果の副産物、所謂学位である。

八、現在職務は京城回生病院長、三山研究所長²⁷

その一方、同じく医学界のメンバーである劉相奎（号：太虚）²⁸は次のように評価している。

朝鮮医学界のエ・メイコよ 朝鮮天地に旋風を惹起した君、勿論君が初めてである事も関係があるが、今日の博士報道の貧弱なのは君が博士になった当時の新聞紙のそれが破天荒的だったのと比較して今日の君の寛勳洞一隅に蟄居して殆ど社会と没交渉になったのを考えるとこれを単なる『花無十日紅』を貼り、世道人心の日々強迫するのを嘆くのか。君の独歩独立の意気には敬服しているが、あまりにも相依相存の情緒に欠乏していないか疑われる時には医師界の寂寞を感じないわけがなく、君に対する絶望に近いことを感じざるを得ない²⁹。

つまり、医学博士として社会的責任を果たしていない尹治衡に対する怒りを露わにしている。しかし、その一方で解放後「朝鮮健民会創設」運動に参加していることも確認できる。

朝鮮健民会創設

民族意識が高揚し、完全自主独立国家建設を期して民族文化の向上を図り世界文化前進に貢献しようと朝鮮健民会が創設された。同会では市内に臨時事務所を置いて次のように役員を任命した。

顧問 権東鎮 尹世復

26 (1897-1951.4.5) 1918年京城医学専門学校を卒業し、京都帝国大学に留学して1925年に医学博士学位を取得、1924年から京城医学専門学校で助教授として勤務し、1933年に漢城医師界会長になる。

27 論説「博士号公開」『別乾坤』第11号 1928年2月1日

28 1897-1936 独立運動家として上海に於いて大韓民国臨時政府で安昌浩の秘書を務め、京城医学専門学校で外科医、また講師として勤め、大衆医療保健啓蒙活動に力を捧げた。患者を治療中、丹毒に感染し、1936年7月18日に死去した。葬式は出獄したばかりの安昌浩の主催で京城医学専門学校の校庭で行われた。

29 「医師評判記其1」『東光』第29号、1931.12.27

委員長 李克魯

副委員長 李景錫 尹治衡³⁰

韓国で初めての医学博士として、社会的責任を問われる中、植民地社会環境に於いて政治不問の「蟄居」生活をしていていたが、独立国家になってからは社会活動を再開したことに深い意味合いがあると思われる。

4) 朴泳敦

1905年8月18日生まれ、1928年3月松山高等学校卒業して、九州帝国大学に入学し、1932年学士試験合格して、同年4月から医学部附属医院医員を嘱託され、また、副手を嘱託され、耳鼻咽喉科学教室勤務を命ぜられた。また、同年6月には耳鼻咽喉科レントゲン主任補助を嘱託せられ、1937年1月には助手として命ぜられ、副手嘱託を解かれた。そして、1938年6月13日に『術後性頬部嚢腫(久保)形成の実験的研究』という論文で九州帝国大学医学博士になった。その後、同論文を『福岡医誌』³¹に発表した。その後の消息は見当たらない。

5) 李重徹 (1904. 1. 26-1945. 4. 14)

1924年3月にセブランス医学専門学校に入学し、1927年3月に卒業した。同年4月に朝鮮総督府から医者免許を取得し、産婦人科で勤務した。1928年4月に全羅南道靈光邑で開業し、後に京畿道江華郡吉祥面に移るが、一方、京城帝国大学小川外科で研究し、1929年11月に母校に戻り、助手を務めた。1931年10月に中国北京の協和医科大学の脳系科教室の研究生として6ヵ

月在籍し、母校に復帰して講師となる。1933年4月15日に国費留学生に選抜されて、九州帝国大学医学部に留学し、医学部精神病学内にある病理組織学研究室で研究し、1934年12月に帰国するが、翌年の1月にオーストラリアのメルボルン大学に行って研究した。下田光造教授と大野章三教授の下で、1935年7月17日に提出した学位論文「麻痺性癡呆ニ於ケル小脳ノ病理組織学的研究」が1935年12月24日に通過され、医学博士学位を授与された。その後も母校に戻り、精神科学教室の助教授に任命され、1937年に主任教授を担当し、教室の発展に寄与した。しかし、1939年に学校の事情により教職を離れ、医院を開業したが、その後亡くなった。李重徹の後輩である南命錫と金麟洙も九州帝国大学に留学した。九州大学医学部神経精神医学教室で出版した同文会名簿によると南命錫は1941年4月から1943年まで留学し、金麟洙は1940年4月から1942年まで留学した。解放後、南命錫はソウル医科大学精神科の教授として、金麟洙は咸興医科大学精神科の教授をしていた。二人とも九州帝国大学で博士号を取得したとされているが、金麟洙については論文³²の情報はあるものの、外については不明のまま、南命錫については後に言及する。

6) 盧基舜³³ (1893-1957)

黄海道甕津郡出身の盧基舜は、1915年3月に京城医学専門学校卒業して4月に九州帝国大学医学部入学し、1917年4月に九州帝国大学医学部卒業して5月に京城に戻り、京城セブランス医学専門学校の小児科講師になった。二回目

30 『東亜日報』1946年6月18日

31 「術後性頬部嚢腫(久保)形成の実験的研究」『福岡医誌』33巻 1940

32 金麟洙「老人脳ノ研究」『福岡醫學雜誌』35(12) pp.1167-1196 1942

33 詳細は筆者の「福岡にゆかりのある問島朝鮮人—盧基舜を中心に—」『日本語文化研究』第3輯 2014.6を参照されたい。

は、1927年12月から1929年4月まで朝鮮總督府公医、1929年8月から1931年4月まで九州帝國大學醫學部医化学専攻科で学び、二人の恩師である金子兼次郎と兎玉桂三の指導の下で、参考論文「妊婦尿及初生児尿並に羊水中の「アラントイン」含量に就て」、主論文「尿酸及「アラントイン」分解酵素に就て 附「アラントイン」比色定量法」(独文)を提出し、1932年1月19日に医学博士(学位番号第503号)を取得した。

博士号を取得する前の1931年4月17日に退学して5月から1932年1月まで同大學病院金子内科に勤務しており、その際に、肺結核を患って九大病院に治療にきた患者である岡島十四子と逢い、結婚した³⁴。

その後、祖国に戻って木浦、後に釜山で開業し、朝鮮医学会でも注目する人物となっていた。しかし、1936年7月に満洲国牡丹江市に移住し、牡丹江國際醫院の臨床医師として勤務し、1942年閏月に移り、閏月共立病院の院長をしていた。また、1942年から1944年まで間島省医学会の副院長、東満医学会の顧問を担当した。日本敗戦後は日本に避難する際にはソ連軍に見つかり、ソ連軍に占領されている日本陸軍病院で通訳と医療業務を担当した。その後、閏月に戻り、個人病院を経営している中、龍井医科大学が設立され、その関係者の要請により、龍井に移住した。1946年10月に吉林省立龍井医科大学の学長に就任してから本格的な医学教育者としての道を歩むようになった。最終的に延辺大學醫學部教授になって、延辺地域の唯一の博士として教育と研究に力を注ぎながら、附属病

院で独特の病状を持った患者の臨床活動を行った。また、延辺朝鮮族自治州の代表としての社会活動も行った。

しかし、1956年頃から「反右派闘争」が起き、日本での博士学位取得、研究経歴、日本人夫人、満洲国での医療活動などの理由で批判の対象になった。そのため、1965年6月に夫人と子供達が日本に移住せざるを得なかった。盧基舜の死去から30年経ち、1987年にようやく再評価され、1988年8月27日には医学院で盧基舜胸像の開幕式が行われた。

7) 李有浩

1915年2月6日咸鏡南道咸興府出身、普成高普を卒業して佐賀高に入学し、1936年3月に卒業して、同年4月から九州帝國大學醫學部に入学した。佐賀時代に論説「批評」を『学友会誌』に掲載し、九大卒業後は一年間助手として働き、日本敗戦後は北朝鮮の咸興医科大学小児科講座長として働いた。『小児科学』『子ども養育法』など多くの図書を執筆し、後輩の育成に貢献していた。金日成勳章なども取得し、1996年11月7日死去され、愛国烈士陵に埋葬されていると言う³⁵。

8) 金弼水

九州帝國大學を卒業して東山病院で勤務し、その後は大邱解剖学教室で教授として在職しており、1954年に亡くなった。

鄭壹千³⁶教授に送った葉書を見よう³⁷。

国立ソウル大学校医科大学解剖学教室 鄭

34 신영정·박세홍 「盧基舜の生涯」大韓医師学会『医史学』18巻1号 2009.6 p.74

35 <http://cybernk.net/infoText/InfoHumanDetail.aspx?mc=EJ0401&hid=EH020300011535&rightType>

36 (1906.6.20-1993.1.21) 現代医学者、1924年に京城医学専門学校に入学し、6年をかけて解剖学教室で学び、1934年に京城帝大で韓国人発の博士学位を取得した。セブランス医学専門学校講師を経て馬山洞醫院を開業、後にソウル大学、釜山大学、カトリック医科大学を歴任。

37 http://www.kpmedal.co.kr/dong_zine/data/zine2010_01.pdf

壺千教授貴下

この炎天にその間皆様お元気でしたか。私達もご配慮のお陰で無事でした。貴教室の活動は大変活発であると察しており、祝賀致します。前日は李永春君を送って下さい、ご感謝申し上げます。お目にかかり感謝しないといけませんが、とても忙しく後回しし遅れてしまい、申し訳ありません。李君は先生がおっしゃったように、大変沈着で誠実であり、向学を楽しめる学生です。将来の大成を期し、これから引き続き指導をよろしくお願い致します。組織学の分野をすることにしました。以上で遅れた感謝の言葉を申し上げ、今後ともご指導と加護をよろしくお願い致します。大邱医大解剖学教室金弼水より

学生を研究室に紹介したとの感謝の言葉にすぎないが、この手紙から彼の教育者・研究者としての真摯な態度が伺える。

9) 金山振東

1915年12月10日慶尚北道奉化郡生まれ、1933年4月に大邱医学専門学校に入学し、1937年3月卒業した。同年4月から大邱医専内科学教室に入室し、6月に医師免許証取得した。同年の8月に大邱医専助手になり、内科教室勤務した。1940年4月に助手を辞職して5月に九州帝国大学医学部専攻科に入学、医化学教室で学ぶ。1941年6月11日に専攻科を退学し、次の日の12日より医学部研究補助員になり、医化学教室に勤務した。1942年3月に研究補助員を辞職し、同年11月24日より、慶北安東に診療所を

開設し、医務を従事していた。そして、「フグ毒ノ精製並ニ二三ノ性状ニ就テ」³⁸を発表し、廣畑龍造、福田徳志教授の下で、同論文で1945年2月27日に医学博士学位を取得したが、その後については今の所、不明のままである。

10) 柳駿

1916年忠清南道天安出身、培材中学校、京城医学専門学校を卒業して1941年に九州帝国大学に留学して細菌学教室で癩菌について研究した。1945年、帰国後ソウル大学医科大学の内科及び細菌学教室に勤め、1947年延世大学医科大学の微生物教室を創設し、33年間教育と研究に勤しんだ。また、1952年に再び母校に戻り、癩菌研究によって九州大学で博士学位を取得し、1955年にカリフォルニア州立大学医学部大学院伝染病学 Ph.D. 取得、56年大韓癩学会を設立し、59年に世界基督教宣明会 (World Vision) 特殊皮膚診療所及びハンセン病研究所を設立した。76年に延世大学医学部長から83年に嶺南大学総長に就任した。94年には国際ガンジー賞など多くの賞を受賞し、2015年3月26日に99歳で亡くなった。論文は、恩師である戸田忠雄とともに発表した「癩菌の集菌法並にメタノール抗原の皮下反応」³⁹があり、著作に『木を植える心－韓国ハンセン病治療のために捧げた生涯』がある。柳駿氏に対する貴重なインタビューがある。(2002年3月2日)

私はですね、皆さんと違って、九州大学の学部を出ていません。今はソウル大学に統一された京城医専学生時代から韓国の癩患者を治すことをしたいというロマンチズムと言いましょうか、若い者の野心と若い

38 『福岡医報』36巻第4号 1943.4

39 戸田忠雄・柳駿「癩菌の集菌法並にメタノール抗原の皮下反応」『総合医学』9号、pp331-333、1952; 柳駿著・牧野正直監修・菊池義弘翻訳『木を植える心－韓国ハンセン病治療のために捧げた生涯』東海大学出版会 2010.5

ましようかそういう希望があったんです。それで京城医専を卒業して、当時日本で戸田忠雄という九州大学の先生、当時日本の医学を背負う四人の1人と言われた有名な方です。尊敬していました。もちろん九大は医学の面では、ずいぶん世界的に貢献した大学なんです。レプトピラー等の発見をはじめ、いろんな貢献したところなんです。

その方がそのいわゆる抗酸菌といって結核と癩の世界的な大家だったんです。日本のBCGというのはあの方が作ったんです。現在でも戸田細菌学というには日本の医学界でも最もいい細菌学の教科書です。

で、その先生のところに私の教授を通じて先生のところに行って癩の勉強をしたいと言って、申し込んだら拒絶されたんです。それで私がその時、卒業間際になってその先生の自宅を訪問して、私は癩の研究をして全人類に貢献したいから弟子になりたい。とにかく彼の教室に入れられて、小鹿島(シヨロクト)という有名な日本の長島愛生園のようなところですが、そこに行ってから好きな時に来ていいと言われ、そこに約10ヶ月、1941年3月卒業して九大にちょっと行って、44年4月頃に帰ったと思います。その間癩の勉強を一生懸命やらされました。研究してそういう私は九州大学の学生の雰囲気といましようか、学風というものはあまりわかりません。ただ、研究して熱心に勉強して、日曜日もない土曜日もない。その時の日本の研究生たちは研究室にも泊まって夜中研究していた。今私に何か思い出がないかと言われたら、一生懸命勉強熱心にやったということと、志があったということとね。私ねその時にね今でも記憶していますが、当時新聞を読

んだらある検事がヤミをしなくて餓死したという記事を読んだことがあります。今も記憶しています。日本人たちがいかに一生懸命働いていたかということをよく知っていますよ。餓死しても法を守る日本人、一生懸命働く日本人を尊敬します。

それで、帰っていわゆる終戦後韓国は大変な動乱期で勉強できなかったんですけれども、ソウル大学に講師で入って、しばらくして延世大学細菌学教室主任、助教授をやり(1947)、そこで癩の勉強をして私の独自のいろんな研究をやりました。

その研究のレベルではですね、日本でもよく知られています。その間、実験的ないろんな学問的な貢献もあります。たとえば癩の予防法を研究したとか、新化学療法による化学的療法、あるいは動物実験で癩の動物実験に成功したとか、あるいは癩の早期診断法を発見したとかいうのがありますけれども、私が世界的に貢献したと思うのは、いわゆる韓国式癩退治法(Elimination)を世界的に提示して、受け入れられたということ。これ本がありますが、国際癩学会(14th International Leprosy Congress Orland, Florida, Us)で1994年度に講演した時の著書です。

いわゆる、A Korean Model for the Healing of Leprosy、癩治癒の韓国的モデルとしてはよく知られています。それは、一言で言いますと癩を日本のように強制収容・隔離法によって退治するんじゃなくて、精神的・肉体的・社会・経済的リハビリテーションそういう方法によって癩を退治するのです。

1945年終戦後、韓国は大混乱をきたし、癩患者達は小鹿島(シヨロクト)等の強制収容所から脱出し、全国至る所に癩流浪者

が充ち全国的に約5000人あまり居りました。彼らは今までの強制収容を非常に恐れ、再度収容されることを反対していました。これら流浪者達はその95%が、自在に必要な労働力を保持していました。私はこの問題を解決するために、ごく少数の同志と私の弟子と、患者自身の良心と能力にその基本を置くことにしました。

当時、我等が掲げたスローガンを思い出します。

スローガン：「我らもこの国の国民の一人だ。

祖国再建のためには我等にも義務がある。

我等が死ぬ時、癩も共に死のう」

そこで希望村 (Hope Village movement) なるものを造り、山間の遊休地を開拓し、「新しい生の基地」と致しました。

同志と弟子と共に女学校の生徒達に協力を求め、街頭募金運動をやり、相当の資金を得て経費に使いました。

絶対に乞食はしない。人間らしく生きる。自分ができるとは何でも自分でやるという考えでした。そしてお互いに助け合う。

最初約150名程度で始めたこの村が、約1ヶ月後には約500名程度の村になり、この運動と同時に当時民間団体として大韓癩協会が組織され、この運動が全国的に広がり、1950年6月25日に韓国戦争が起こるまで、全国約5000名の流浪者が16ヶ所に安住することができました。

戦争はこの状況を、みな以前の状態に戻りました。

それから5年後、1955年7月に癩協会が

再建され「癩は治る」という新しいスローガンのもとに、5年前の希望部落運動は定着部落運動と改名され、組織的なハンセン病治癒運動になり、今に至っております。

この運動には三つの基本理念があります。その1は精神的再活 (Spiritual Rehabilitation)、その2は肉体的再活 (Physical Rehabilitation)、その3社会的・経済的再活 (Socio-Economic Rehabilitation) です。

この方法のもとに政府はその間「治癩政策」を続け、現在年間新患者発生数20名 (総人口約45,000,000) で、定着部落で自立した人々のGDPは約20,000ドル (一般人10,000ドル) です。

1963年に癩収容法は廃止され、結核と同じになりました。今はその名前も癩からハンセン病 (HANSEN'S Disease) となりました。

我等は1991年11月4日から International Leprosy Congress Seminar, Seoul で、韓国の HANSEN 病は WHO の基準で解決されたと宣言したことがあります。

その間韓国の救ハンセン病運動を助けられた多数の人々、また機関が多くありました。特に故朴大統領令夫人陸女史、アメリカのパブピアース牧師等に助けられました。

しかし、それ以前に私に癩を教え、問題解決の基本能力を教えてくださいました九州大学の戸田忠雄教授、占部薫教授、並びに九州大学に感謝します。

延世大学の教授、学長 (医学部長) 等から退職して、朴大統領が造られた嶺南大学校の理事長、総長を務めたことなども、私が最も感受性が高かった時代、九州大学の学風と教えてもらった先生、親友達に負っ

たところが多いと思います。一生忘れられません。

柳駿は「韓国の癩患者を治す」「癩を研究して全人類に貢献したい」という強い信念の下で、当時日本の医学を背負う有名な学者である九州帝國大学の戸田忠雄教授に自らアプローチし、受け入れてもらってからは一生懸命に研究して遂に韓国の癩対治法を世界に提示できたことをとても誇りに思っている。それにはまず、研究環境を提供してくれた九州大学、恩師である戸田忠雄教授等に感謝している言葉に九大卒業生の気持ちを表している。政治に惑わされず、研究にだけ集中した植民地末期のエリートの様子が伺われる。

11) 南命錫

1916年12月20日忠清北道槐山郡出身で、1934年に京城旭医学専門学校に入学し、1938年に卒業した。同年4月から副手になり、5月に医師免許取得した。その後の39年に副手を辞し、4月より李重徹医院に勤務するが、1941年3月に辞職し、すぐに九州帝國大学医学部附属医院医員を嘱託され、精神科に勤務する。1943年6月に医員を辞し、同年9月1日より専攻生として入学して精神科医の下田光造教授の指導を受ける。1944年5月に専攻生を退学して李重徹医院に勤務し、45年4月に辞職してから5月に忠清北道槐山郡に開業した。1947年5月28日に「電気衝撃ニ因ル脳ノ病理組織学的研究」(中脩三、小野興作教授調査)で博士学位を取得した。前述したように、彼は李重徹の後輩であるため、強く影響を受けているのが確認できる。光復後はソウル医科大学精神科の教授として活躍しな

がら、論文も発表された⁴⁰。

12) 重村昌宏 (鄭昌杰)

1909年8月29日平安南道平壤府生まれ、1930年4月に平壤医学専門学校に入学し、1934年3月卒業して同年8月医籍を登録した。また、同年9月から奉天市鄭医院勤務し、1935年3月に辞職し、4月から平壤医学専門学校小児科教室副手になる。翌年の4月辞職してし、同年5月平壤府に医院開業するが、1942年7月に廃業し、同年8月に九州帝國大学医学部附属医院医員を嘱託され、小児科に勤務する。1943年4月学部専攻生入学して遠城寺教授に指導される。1945年2月に附属医院医員を解職され、同年朝鮮平安南道立鎮南浦医院医務嘱託、小児科医長になる。同年3月に九州帝國大学医学部専攻生退学が許可される。遠城寺宗徳と平光吾一教授の下で1945年8月24日に論文「小児ノ体型及ヒ外貌ニ関スル研究」で博士学位を取得した。

13) 金萬達 (天野達人)

1916年3月19日韓国慶尚北道大邱市生まれ、1939年に大邱医学専門学校を卒業して、同年4月に外科学教室に入局する。同年6月から1941年6月まで助手になり、7月から京城女子医学専門学校の助教授になり、1942年12月に依願退職する。1943年1月31日に九州帝國大学医学部専攻生入学法医学教室在籍(指導教官北條教授)し、1944年12月30日に同専攻生退学する。同日九州帝國大学助手に任ぜられ、医学部勤務を命ぜらる(法医学教室)。1945年6月に退職して、1946年4月から大邱医学専門学校の副教授に任命され、法医学を担当する。1947年7月より同校大学昇格により大学助教授にある。九

40 南命錫「患者の心理」『最新医学』Vol.5 No.7 p.141 1962；金光日・南命錫等「骨仁に依る麻薬中毒者の治療成績」『現代医学』第5巻4号1966

州大学医学部薬学科裁判化学講座教授の塚元久雄と九州大学医学部医学科法医学講座教授の北條春光の調査の下で、『諸金属中毒の可視並びに紫外線分光学的研究』で1953年10月24日に学位を取得した。

5. 九州帝国大学で医学博士学位のみを取得した者

当時、留学生ではないものの九州帝国大学で博士号を取得した者として四名を取り上げる。

1) 姜日永

1900年3月19日京城府生まれ、1921年4月京城医学専門学校に入学、1925年3月に卒業、同年6月に朝鮮道立医院被命、慶尚北道道立大邱医院に勤務、1927年4月慶尚北道大邱医学講習所講師、1928年6月京城医学専門学校助手、1929年9月京城医学専門学校看護婦養成所講師、1932年6月朝鮮総督府京城医学専門学校講師、1934年5月九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科を見学、見学期間四ヶ月であった。その後博士号を取得することになるが、これについて、『東亜日報』1935年3月30日では、「医専講師姜日永氏 博士論文通過 廿五日九大医学部に」と大きく取り上げている。

京城医学専門学校の講師である姜日永氏は去る十一月に主論文「慢性鼻炎及鼻腔炎（蓄膿症）に関する臨床的及び実践的研究」他参考論文を九州帝大医学部教授会に提出し、その論文は去る二十五日に通過され、博士学位を取得した。氏は京城出身で大正十四年に京城医専を卒業し、同付属病院耳鼻咽喉科で続けて研究し、昭和式年に同校講師に拝命された学者であるとしている。

既に、『京城医専紀要』に「慢性鼻炎および副鼻腔炎に関する研究」⁴¹を発表しており、また、京城医学専門学校講演部では毎年通俗医学講演を行い、衛生思想の普及に貢献している中で、姜日永も「鼻性低能」というテーマで活動していた⁴²。

その後の1939年にソウル市鐘路区仁寺洞137に姜耳鼻咽喉科を開業する。朴泰遠の小説『小説家仇甫氏の日』にソウル市の様子を描写している中、「病院」の所が、姜耳鼻咽喉科ではないかとの推測している人もいるが、1934年発表の小説と1939年開業の姜耳鼻咽喉科と时期的にずれがあるので、ここに記しておきたい。

2) 金龍業

1903年3月21日 京畿道富川郡生まれ、1926年4月京城帝国大学医学部入学、1930年卒業して同校産婦人科副手になり、1938年7月より蒙疆張家口市日本居留民団嘱託医を命ぜられ、博士号申請した時点での住所が蒙疆張家口市皇（朝上に広の外）街一号になっている。調査委員は、衛生学講座水島治夫教授、生理学第一講座緒方大象教授で、1943年2月19日に「人体皮膚温度に関する研究」で学位を取得した。

3) 松島信雄（裴英基 1908.5.18-1996.4.3）

朝鮮平安南道江西郡生まれ、1930年4月に平壤医学専門学校に入学して1934年3月卒業する。同年4月より同校衛生細菌学教室副手を嘱託され、同年11月1日より同校助手に嘱託され、1938年5月には医師免許を取得する。同年6月からは京城帝国大学医学部衛生学教室専攻生に入学、1940年6月に専攻生退学し、同年8月に平壤道立医院眼科室副手になる。1941年12

41 『京城医専紀要』4巻 p.430、1934

42 『東亜日報』1935年10月19日

月に医務嘱託され、1942年4月30日嘱託解して、同年6月に九州大学医学部付属医院眼科学教室医員を嘱託され、仕事しながら1943年2月1日に博士学位取得の申請を行い、同年4月に学位を取得した。論文テーマは「学齡期ニ於ケル朝鮮兒童ノ体位ニ関スル研究」であり、調査委員は民族衛生学・植民衛生学講座担任水島治夫教授、眼科学講座担任田村茂美教授である。

1945年9月から平壤医学専門学校教員、1946年から伝染病研究所所長を務め、1946年金日成主席の委嘱状により、金日成総合大学医学部教員、平壤医学大学初代衛生学部長、1952年8月より平壤医学大学教務部学長、衛生予防所所長、研究者として活躍した。また、『衛生学論学』『公衆衛生学』『栄養衛生学』など出版を重ね、予防医学分野の後輩の育成に貢献した⁴³。

4) 光本重信 (朴己出 1909-1977、医者・政治家)

1909年4月釜山府生まれ、1934年東京医学専門学校卒業し、同年5月より釜山府立病院医員を拝命されるが、1939年9月同院を辞し、同年10月より九州帝国大学医学部附属医院医員を拝命される。1943年7月27日に「ヒスタミンに関する研究」で、薬理学講座福田得志教授、皮膚科学講座皆見省吾教授の下で博士学位を取得する。その後、釜山で開業していたが、終戦後、政治活動をし始め、1956年に曹奉岩と進歩党を結成して副委員長になる。1971年の国民党の大統領候補として出るが、落選され、1973年に日本に戻り、僻村の保健所で医者活動をし、後に帰国する。大韓医学協会会長、慶尚南道医社会会長、民族統一問題研究院理事長などの要務を歴任する。

6. 終わりに

以上、九州帝国大学学部以降の卒業生13名と博士学位のみを取得した者4名を取り上げ、次のように結論付けた。

朝鮮人学生は官費留學生が多数で、最初の留學生である金台鎮は政治家の愚かさから国家、人々のために医学留学していた。彼のように併合当初の留學生は政治に敏感であったが、後には学問のみを追及したケースが多かった。医学部における専攻生制度は、学外に職を持つ医師に、特に基礎医学系教室での研究の道を開くことになり、博士号の学位取得へと繋がった。卒業生はエリートコースとして、九州帝国大学で学んだ知識を有効に活用し、戦後も政治情勢に左右されず、学問の発達、医療人の育成に貢献できた。また、盧基舜が日本・朝鮮半島・「満洲国」・中国で活躍できたのは、彼が医者という身分であったからこそその結果であると推察できよう。つまり、日本植民地統治下で官費生として日本に留学し、朝鮮総督府公医として、満洲国国際病院に勤務できたのも日本の統治手段として医療人を育成・活躍させた事例であり、光復したばかりの空間に於いて、医療教育システムが体系化していく中で、医療人が一定の役割を果たした事例でもある。最後に九州帝国大学で学んだ卒業生は常に母校に対する愛着と恩師に対する尊敬を表している。

今後、引き続き朝鮮人留學生に関する新しい史料の発掘と中国人留學生についての研究を取り組んでいきたい。

【参考論文】

九州帝国大学医学部編『二十五年史』九州帝国大学医学部事務所 1928.10
九州大学医学部『五十年史』九州大学医学部創立百周年



延辺大学キャンパスにある盧基舜博士胸像（筆者撮影）

記念事業後援会 1953.12
 九州大学医学部『七十五年史』九州大学医学部創立七十五周年記念事業後援会 1979.6
 『九州大学医学部百年史』九州大学医学部創立百周年記念事業後援会 2004.3
 九州医報編集部編『九州大学医学部学友名簿』九州大学医学部同窓会 1963.9
 九州大学創立五十周年記念会『九州大学五十年史学術史上巻』九州大学創立五十周年記念会 1967.11
 延辺歴史研究所『中国朝鮮族人物伝』延辺人民出版社 1990
 九州大学韓国研究センター著『朝鮮半島から九州大学に学ぶ』九州大学韓国研究センター 2002
 折田悦郎著『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書 2004
 尹宗柱編著『中国朝鮮族医学教育先駆盧基舜』延辺大学出版社 2012.1
 近代アジア教育史研究会編『近代日本のアジア教育認識・資料編 第2巻』龍溪書舎 1999
 阿部洋「旧韓末の留学（1）」東京韓国研究院『韓』第29号 1974
 신영정・박세홍「盧基舜の生涯」大韓医師学会『医史学』18巻1号 2009.6
 高仁淑「日本の大学に入学したアジア人留学生の追跡調

査研究 — 九州帝国大学への朝鮮人留学生を中心に —」『九州大学大学院教育学研究紀要』5号 2002
 金斑実「福岡にゆかりのある間島朝鮮人 — 盧基舜を中心に —」『日本言語文化研究』第3輯 2014.6
 金斑実「『学生寫眞帳』から見た九州帝國大學農學部の留學生」『九州大学留学生センター紀要』第23号 2015.3
 金斑実「大学文書館所蔵資料から見た九州帝國大學法文學部の留學生」『韓国言語文化研究』第21号 2015.03
 金斑実「九州帝國大學に學んだ留學生 — 工學部を中心に —」『九州大学留学生センター紀要』第24号 2016.3
 『九州帝国大学時報』
 『東亜日報』
 『中央日報』
 『福岡醫學雜誌』

（謝辞：本稿は朝鮮学会第67回大会にて発表した「日本への医学留学の足跡 — 九州帝國大學醫學部朝鮮人留學生を中心に —」を加筆修正したものです。また、本研究は九州大学文書館の折田悦郎教授の多大なご支援とご指導により成り立っています。この場を借りて朝鮮学会及び折田教授にお礼申し上げます。）